

羊が取り持つ不思議なご縁

—国際ウールチャレンジ—

Tokachi Sheepship

川瀬 雅子



▶ 毎年5月の末から6月の初旬にかけて、1頭の羊と8人の職人(?)によるちょっとマニアックな競技会が世界各地の会場で開かれます。その名も“Back to Back International Wool Challenge”。羊の背中(Back)から人間の背中(Back)へ、つまりヨーイドンの合図とともに大きな握りバサミで羊の毛を刈り、足踏み式の紡ぎ車で糸に紡ぎ、セーターを編み上げるタイムトライアル競技です。

▶ しかしいくら「ひつじ年」とはいえ、なぜ突然「羊」がW Wavesに乱入したのか、まずはその経緯を当該競技会の歴史とともにご説明させていただきます。

▶ 時は1811年、場所は英国バークシャー、羊の毛刈りから始めて1日でコートを編み上げられるか否か、1,000ポンドの賭けが行われました。5,000人の観客が見守る中、コートは13時間で完成しました。ちなみにその時の羊はお祝いの宴席で、したたかのビールとともに皆のお腹に納まったそうです(それを残酷と評するなかれ、羊は遠い昔から人間の衣食住すべてを支える大切な家畜だったのです)。

▶ さて時代は

流れ180年後のスコットランド、若き紡ぎ職人リチャード・スノウ氏は甲状腺癌に侵されています。彼は何とか癌の治療研究を推進するために基金を募りたいと考え、伝説のウールチャレンジ競技の復活を思い立ったのです。このイベントは、賭け事同様チャリティー活動にも多大な関心を持つ英国の人々の注目を集めました。

▶ ちょうど同じころ、オーストラリアでも紡ぎと編みの速さを競う競技会が開かれていたのですが、その関係者の1人が英国ヨーク大学で開催された有色羊の会議に出席したことがきっかけとなり、1995年から現在の形の“Back to Back International Wool Challenge”(国際ウールチャレンジ)が開催されることとなったのです。リチャード氏の願いどおり、この大会は競技そのものと同時に癌の治療研究に対する募金活動が大きな目的として掲げられ、その両方の結果に対してトロフィーが用意されています。

▶ 日本からは2000年に千葉のチームが初参戦し、わが十勝チーム“Tokachi Sheepship”は2001年から参加しています。参加申込書の記入にあた



十勝チームのシェアラー酒井さん▶競技風景（左で紡いでいるのが筆者）▶完成したセーター▶ウールチャレンジ in 十勝競技風景

り、募金先をインターネットで検索したところ「日本癌病態治療研究会」のページに行き当たり、会則の中に「経費は会費および寄付金をもってこれにあてる」の一文を見つけて、大胆にもいきなり事務局の生越先生にメールを送りつけてしまったのです。肝心の募金の方はと申しますと、わざわざお送りいただいた感謝状作成の手間と送料などを考えると、冷や汗ものというほかありません。

▶さて、ここで競技の内容をご説明しましょう。ウール製品を1枚も持っていないという方は少ないと思うのですが、「羊」から「セーター」ができるまでの工程を具体的にイメージできる方というと、これまたあまり多くはいらっしゃらないのではないのでしょうか。大雑把に整理すると、

- | | |
|----------|--------|
| ① 毛を刈り取る | ④ 梳かす |
| ② 洗う | ⑤ 糸に紡ぐ |
| ③ 染める | ⑥ 編む |

▶途中の順番は前後することがありますが、だいたいこんなところです。「国際ウールチャレンジ」ではこの中の2から4の工程は省略し、刈り取っ

た羊毛を手でほぐしながらそのまま紡ぎ、2本撚りの毛糸にします。1人のシェアラー（毛刈り職人）と7人の紡ぎ・編み担当者として、電動器具は一切使用せずにすべて手作業で8時間以内に規定のセーターを完成させます。

▶「国際大会」といってもすべての参加チームが一堂に会して競技を行うわけではなく、あらかじめ日時、会場、競技参加メンバー、審査員、タイムキーパーなどをオーストラリアの事務局に届け出て、毎年設定された日までにすべてのチームが結果を報告することによって順位が決定されます。「羊にかけてズルはしません」という紳士淑女協定の下の行われる、なんとも平和な競技会なのです。

▶タイムキーパーの合図とともにシェアラーが羊を押さえ込み、一番紡ぎやすそうなところからハサミを入れます。メンバー以外は毛に触ることができないので、1人が毛を受け取り、紡ぎ車の前で待機している6人に配ります。2人分の糸を撚り合わせ、ある程度の糸ができたなら4人で2枚の身頃と2本の袖を編み始め、残りの3人はひたすら糸を紡ぎ続けます。4つのパーツを縫い合わせてセーターを完成させるのですから、勝負のポイ



川瀬家のペット羊たち

ントは大きいほうのパーツ、96目162段の身頃2枚をいかに早く編み上げるかにかかっています。編み物を趣味となさる方がもしもいらっしゃったら、試してみてください。5時間以内で編みあげられればスカウトに行きます!

▶現在の世界記録は、1997年に英国シェットランド地方のチームが成し遂げた5時間9分という驚異的なものです。このチームは他チームとの差があまりにも歴然としていたこともあり、2度の優勝の後、参加を辞退しています。以降、2001年にオーストラリアのチームが5時間58分1秒の記録を出すまで、6時間の壁を破るチームはありませんでした。

▶十勝チームはというと、1年目は6時間42分3秒で参加36チーム中第4位、2年目も自己記録(日本記録)は少々更新したものの6時間38分でまたもや4位の成績でした。しかし、3位のスコットランドのチームとの差はわずかに1分42秒。相手の顔が見えないだけに、この僅差はなんとも悔しい。今年はなんとか3位入賞を狙いたいものです。

▶早紡ぎ・早編みというと、雑に作ることに誤解

し、「そんなことをして何の意味がある」とおっしゃる方もいます。けれど日本一、世界一の早編みを目指すためには編みやすい糸が必要です。編みやすい糸を手早く紡ぐためには、汚れや油が少なく、紡ぎやすい良質な羊毛を提供してくれる羊が必要です。羊の品種選びから始まり、飼育環境、餌、健康管理など、いずれも最善を目指します。自分にあった紡ぎ車を選び、調整し、編み棒の素材にまでこだわります。羊とかかわり、手作りを愛する者にとっては、まさに究極の競技なのです。

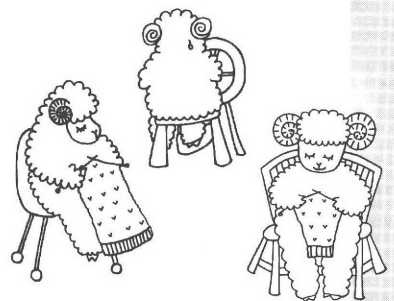
▶日がな一日、食べて食べて反芻し、昼寝から目覚めてはまた食べる。羊は本当に平和な生き物です。草地に寝そべてうらうらとうたた寝をしているうちに重心が背中に移ってしまい、ひっくり返された亀よろしく自分では起き上がれなくなってしまふマヌケ者もいます。中年以降の太り気味の羊に見られる現象だと聞くと、前足を引っ張って起こしてやるのになにやら身につまされるものがありますが、のんきな顔をみていると自然に肩の力が抜けてきます。そういえば、ゆったりと糸紡ぎをしているときの脳波は瞑想時同様、 α 波が

出ているのだそうです。近年「スローフード」が見直されていますが、疲れた日本人にとって羊ののどかさや手間を惜しまない物作りは、安らぎを得るための貴重なものかもしれません。

▶ 私たち Tokachi Sheepship のメンバーは羊のすばらしさ、手作りの楽しさを多くの人たちに知っていただくため、毎年5月に「ウールチャレンジ in 十勝」というイベントも主催しています。全国から参加者を募集し競技を行っていただきますが、「8時間でセーター」では完成するチームが出なかったため、昨年からは「5時間半以内でベストを編み上げる競技会」とし、並行して糸紡ぎやフェルト作りの体験、優秀な牧羊犬を自在に操り羊を追い込むシープドッグショー、ラム肉料理の屋台など、編み物とは縁のない方々にも楽しんでいただける企画をいろいろ設けています。

▶ 会場となる十勝・池田町のスピナーズファーム タナカでは、通年で織りやフェルト作りの講習を受けられる工房のほか、希少種も含め10種類60頭の羊を見学することができます。特に5月から初夏にかけては出産シーズンで、ホルスタインの

ミニチュアのようなジャコブ種の子羊や、動くぬいぐるみのような真白な子羊たちが遊び回る姿を見ることができます。のんびりと羊を眺め、おいしいワインを傾けて日頃のお疲れを癒したい方はどうぞ十勝においでください。いつでも歓迎させていただきます。



© Wool Challenge in Tokachi